

隨泉寺寺報

2003 年 1 月号

第 389 号

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

御正忌報恩講法座

講師 住職自修

講題 「御伝鈔のころ」

新年おめでとうございます。

《過去を追うな。未来を願うな。過去はすでに捨てられ、未来はまだ来ない。だから、ただ現在のことを ありのままに観察し、動揺することなく、よく理解して、実践せよ。ただ今日すべきことを熱心になせ。明日、死のあることを誰が知ろうか。かの死神の大軍と会わないわけではない。このように考えて、熱心に昼夜怠ることなく励む人、このような人を一夜賢者といい、寂靜者、寂黙者という。》

『大迦旃延一夜賢者経』

今年も新しい一年が始まりました。去年の正月、今年大事な人のお葬式をする
と予想した人があるのでしょうか。「こんなはずではなかったのに・・・。」「まさか
うちにかぎって・・・」「夢ならさめてほしい・・・」

過去・現在・未来を【三世】といいます。しかし仏教では【過去】は現在の原因
であり、【未来】は現在の結果ととらえます。だから今、生起している【現在】
こそ問題となるのです。仏教は「いま」「ここ」「わたし」が問題となるのです。『阿
弥陀経』に【今現在説法】と説かれています。今、私に問いかけているのです。今
悲しくて泣いている私がお目当てです。今年は私のお葬式をしてもらおうかもしれ
ません。

1 月の法座予定

1月14日昼席午後1時より……御正忌報恩講法座

1月14日夜席午後7時半より……御伝鈔上巻拝読

1月15日朝席午前10時より……御伝鈔下巻拝読

1月15日昼席午後1時より……御正忌報恩講法座

お齋があります

新年互礼会

特例帰敬式（おかみそり）のご案内

帰敬式【ききょうしき】（おかみそり）は・・・。

浄土真宗の門徒として、阿弥陀さまのご尊前（そんぜん）で、み教えに帰依するこ
とをあらわす生涯ただ一度の大切な儀式です。

真宗門徒の方なら、おかみそりという言葉は一度は耳にしておられることでしょう。
正式には帰敬式（キキョウシキ）といいます。おかみそりとは、帰敬式の儀式の中
に剃刀（剃髪）の儀があるので、こう言うのです。帰敬式は、法名をいただく
ことです。帰敬式とは、帰依敬礼ということ、三宝（仏、法、僧）に帰依する儀
式であり、仏法仲間にはいることを意味します。

法名をもつとは、南無阿弥陀仏を信仰の要（かなめ）とする真宗門徒が、仏法仲
間にはいる証（あかし）としての**名のり**なのです。法名の形式は「法名釈〇〇」と
いうのが基本型になります。釈は釈尊の頭の字をいただいています。〇〇の二字は
その人ごとに決まってくるわけです。経典の中からの字や言葉を**西本願寺のご門
主さま**が選んで付けてくださいます。法名は死んでから、死んだ時うけるものと理
解されている方が多いのですが、**生きているうちに受けるもの**です。生きている
私たちが法名をいただくことで、真宗門徒としての積極的な生き方を自らに問う契
機にさせていただくのが、願いではないでしょうか。親からいただいた名前は大きな
意味と願いがかけられています。法名はその人の信
仰に関する**名のり**です。釈 という名を表明すること
で、初めて仏法仲間に入る宣誓をしたことになるわけ
です。昔、滋賀のご門徒では死んだ時に法名がなかつ
たら、死に恥をかいたといわれています。法名受式は、
パスポート取得のようなもの。少しおかしな表現かも
しれませんが、大切さと前提という意味では同じよう
なものです。



帰敬式は本来、本山西本願寺で受けるべきですが、病
気や高齢のため、京都まで行く事が出来ない人のために、**今回広島別院で特例の
帰敬式が開催**されます。

申し込み用紙は隨泉寺にあります。ご希望の方は申し出てください。

期日：平成15年3月13日（木）午前10時から

受式費用 13,000 円

新年互礼会

今年も例年の如く新年互礼会を行ないます。門信徒の皆
さん誘い合わせて参加して下さい。

上野美術館

椿谷通俊

辿り着いた美術館のレストランで腹一杯昼飯を食べる。自宅からここまでは予定通り来た。これから予定通り行くか不安はあったが先ず腹一杯になったのが嬉しい。すぐに立ち上がって二紀展会場に向かう。心は急ぐ、他の絵はいつでもよい訳では無いが、先生と私の絵のことが心の中に一ぱいになっている。

家から持ってきた優待券を出して左手に持ち、少々緊張の面持ちで受付にちらっと見せる様にして、初めての二紀展覧会場に足を踏み入れた。



先生の作品は入り口正面玄関の様な所にあった。二紀会有名作家の大作が一堂に架けられた中に立つと、さすが東京だなと思い、同時に些か毒気が抜け背中が涼しくなった。1号室から2号室と見ているうちに、知っている絵に数々出会い、今年はこれが等と興味深く見ているうち、疲れも加わったのか、次第に絵の迷路に入った様で、多数の大作から見返され、次第に自分の絵が心配で落ち着けなくなり、そわそ

わと壁面に目を走らせる。次の部屋はどうだろう、無い 次も無い 不安な様なものが一瞬心をよぎる。 次の部屋もそっと覗き、広い壁面をさっと見回す。アッ・視線に何か引っ掛かった。 目をとめる。 それは紛れもない私の絵だ。有った有った、ここに有った。落ち着かない気持ちと緊張感がすーっと消え、ゆっくりと歩み寄り我が絵の前に立つ。誇らしやかに胸を張っている。「おお」「頑張っているな、ここまで見に来たよ」と言いかけて止めた。

この展示室は二階の15号(入選佳作)室で、次は一階の14号室となる。二紀に、今後も挑戦を続けるとするなら「ぜひ一階に展示されるように成りたいものだね」とも語りかけたかった。

帰途のことを思うと心が焦るので壁面の絵に名残を惜しみながら、上野の森を出て駅に向かった。美術館のレストランを立つとき、ショルダーの底に納めていた二紀会展優待券を取り出し左手に持った、右手でなく左手にしたのは意味がある。優待券は誰でも持っているものではない筈、それを軽やかに持って受付を通りたい、只それだけのことである。

ついその辺から来たような顔をして受付に差しかかり、左に持つ優待券をちらりと見せた。 どうだろう、果たして受付の東京美人が軽い会釈をして、右手を伸ばし、入り口を指し示した。その方向に歩む、そして念願の二紀第56回展覧会場に足を踏み入れた。と 正面に黒ぶちの赤い線の入った、見覚えのある石像の200号の絵が架かっている。先生の作品がここにあった。この第一展示室は二紀会がテーマ室として、現在の旋律を内は勿論外に向けても、アピールする意図の下に設けられた展示室であろうと思っている、その第一展示室入り口正面の壁面に架かる作品は今年の二紀の主題としての最もたるものではなかろうかと思った。

先生の絵は絵肌が濡れている様に新鮮で、白い陽の当たる岩肌の部分は銀の彫像の様な輝きを感じられて、アトリエで見た時の感動より一周り強いものを感じ、そしてひどく親しみも沸いた。してはならないけれど一寸絵肌に指を触れてみた。

暖かかった。先生の絵を正面にして左を見ると、直角に交わる壁面に一昨年文部大臣奨励賞受賞の秋山さんの作品が架かっていた。左の目で秋山先生の、右の目で難波先生の絵を佇立し呆然と感慨に浸りながら観ていて、流れる人に当たってふと我に返り、あ、ここは東京なんだと思い、先を急ぎ自分の絵を捜す気になった。

今年も入選を果たすに止まらず、展示室を一室でも上位に進めたいと心に期待するものがあったので、室番を辿りながら祈りのも似たような思いで自分の絵を捜した。

絵は二階の第16号室(入選佳作)と書かれた部屋に架かっていた、16号室は他の室に比べ展示がゆったりとしていて落ち着きがあり、絵毎絵毎の

色彩調整も配慮されているようで、それぞれ作品が堂々として見えた。私の絵は100号で他に比べて小さく、次回は130号かなとも思ったが、小なりと言えども他の作品に伍し気を噴いていると見えて、おお頑張っているな、ここまで見に来たよと声をかけたかった。

